

2022年9月2日

# 資料館通信 第82号

ふじみ野市立 上福岡歴史民俗資料館 埼玉県ふじみ野市長宮1-2-11 TEL 049-261-6065  
大井郷土資料館 埼玉県ふじみ野市大井中央2-19-5 TEL 049-263-3111

## 令和4年度巡回平和展

### 「ふじみ野1942

上福岡歴史民俗資料館 7月23日～8月21日

大井郷土資料館

8月27日～9月19日

### ～戦果にほんろうされた人々～

資料館では毎年、夏季に戦争と平和について考える企画展を行っています。今年度は、80年前の「1942年」という年をとりあげ、太平洋戦争のめまぐるしく報告される「戦果」に人々がゆり動かされる様子や戦局が悪化へ向かっていくなかで、東京初空襲、シンガポール陥落、ソロモン海戦など当時の出来事や節約の呼びかけ、報国債券、貯蓄債券を勧める広告など80年前の雰囲気を生々しく感じられる資料を展示しました。この年は、国内が本格的な爆撃にさらされることはありませんでしたが生活全体が戦争を意識したものに変わっていく過程を展示を通してお考えいただければ幸いです。

## 海軍下士官の軍装

中田商店刊『大日本帝国陸海軍軍装と装備』1978年を参考に当時の海軍下士官をイメージしました。



海軍制帽

海軍軍服（夏服）上衣

海軍軍服（夏服）袴（ズボン）

## 経済の統制、戦費調達

戦争を開始した日本は、豊富に産出する天然資源を確保するため、当時アメリカやオランダ、イギリスが植民地としていたフィリピンやマレー半島、ジャワ島を目指して進軍していく。一般的に東南アジアと呼ばれるこの地域は、石油やアルミニウムの原材料となるボーキサイト、鉄の原料となる鉄鉱石、天然ゴム等、

日本ではほとんど産出しない天然資源が豊富に産出された地域であったので、戦線の維持のために占領しておく必要があった。また国内では、物資確保のための経済的な統制、戦費の調達のための政策がとられた。貯蓄奨励やくじ付きの債券購入、衣料品の切符制の実施などが代表例である。

### 貯蓄債券・報国債券・弾丸切手

日中戦争などで戦線が拡大すると戦費調達のために1937(昭和12)年9月から臨時資金調整法が制定・施行された。戦時貯蓄債券、戦時報国債券、弾丸切手などの名前で売り出され、宝くじのように期日がきたら等級ごとの当選が通知されて引き換えられるようになっていた。写真週報などにさかんに広告が載せられた。

## 戦果に沸く銃後の人々

開戦以来、連戦連勝を重ねる日本軍の姿をラジオによる大本営発表や写真週報などの写真雑誌を通じて知った国民は、日本軍の上げた戦果に沸き立っていた。特に、1942(昭和17)年2月15日に陥落したシンガポールは、イギリス東洋支配の重要拠点であったことから、大体的に報道された。通信省(現在の郵政省)によるシンガポール陥落記念切手が発行され、2月18日には、東条英機首相出席の下、日比谷公園『大東亜戦争戦捷第一次祝賀国民大会』が開催された。同時に、全国にシンガポール陥落祝賀行事の指令が出された。戦果を華々しく伝える映画も作成され、田谷英二監督の手による『ハワイ・マレー沖海戦』は、1942(昭和17)年年末に封切られて大ヒットを記録した。こうして、国民の戦意高揚感は否応なしに高められていった。しかし、高揚していく気分とは裏腹に、1942(昭和17)年1月1日からは、塩が通帳による配給制となり、ガスの使用割当制度も始まった。さらに、4月1日からは、食糧管理法(昭和17年2月1日制定)が施行され、主食の米が配給制となった。

国民の自由な経済活動は認められなくなり、配給制度が強化されて、国民は自らが生産したものを自由に取引することも出来なくなった。精神的な高揚と反比例するかのようになり、国民生活は、物質的な面で悪化し続けていくことになる。

### シンガポールの陥落

1941(昭和16)年12月8日、真珠湾攻撃の約1時間前にイギリス領マレー半島のコタバルを皮切りに、各地に上陸した日本軍は、マレー半島を守備するイギリス軍を各地で撃破しながら、当時としては驚異的な速度で南のシンガポールに向かって進軍していった。翌日の12月9日には、日本の上陸船団を襲撃すべく新鋭戦艦プリンスオブウェールズ、巡洋戦艦レパルスを主力とする英国東洋艦隊がシンガポールを出港したが、日本海軍航空隊により撃沈され、イギリスは艦隊戦力を失い、マレー半島周辺の制海権を手放すことになった。

日本軍の進軍は順調に進み、1942(昭和17)年1月上旬にマレー連邦の首都クワラルンプールを占領。イギリスの東南アジアにおける重要拠点、シンガポール攻略の足掛かりを得ることとなった。1942(昭和17)年1月31日、最後のイギリス軍部隊がマレー半島ジョホールバルからシンガポールに撤退し、これまでマレー半島を攻略してきた第25軍司令官山下奉文中将は、

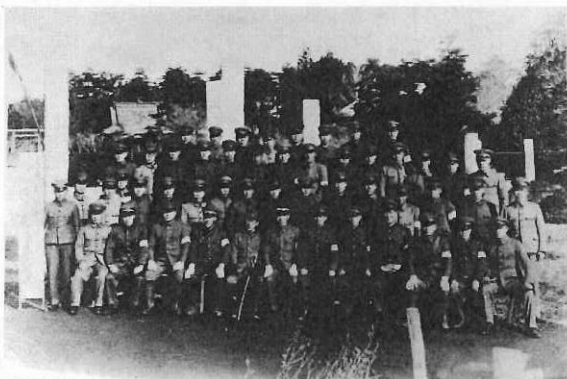


戦時報国債券(昭和17年発行)



シンガポール陥落記事（写真週報 210号、昭和17年3月4日発行）

シンガポール攻略に着手した。日本軍は、2月3日よりシンガポールに向けて砲撃を開始、航空機による爆撃も併用し、攻撃を行っていく。シンガポールに立てこもるイギリス軍は頑強に抵抗したが、増援や航空支援、補給や情報の利がある日本軍側には敵わず、次第に追い込まれていった。2月15日、最終防衛線も突破され、武器弾薬も尽き、飲料水にも事欠くようになったイギリス軍守備隊は日本軍の降伏勧告を受諾した。パーシヴァル中將を頭としたイギリス軍首脳と第25軍司令官山下中將は、降伏のための交渉を行った際に、司令官同士の降



火工廠守衛乙班（シンガポール陥落記念）

伏交渉の場面が記録写真に撮影され、山下中將がパーシヴァル中將に（降伏に）「イエスカノーカ」を迫る場面は、つとに有名になった。1942（昭和17）年2月15日午後5時15分頃、ついにイギリス軍は降伏し、シンガポールは陥落した。イギリス東洋支配の牙城ともいえるシンガポール陥落に、日本国内は沸き立ち、翌日2月16日には記念切手が発売され、2月18日には、マレー作戦や真珠湾攻撃、シンガポール陥落を祝う「大東亜戦争戦捷第一次祝賀国民大会」が、東条英機首相出席の下、日比谷公園で開催された。

昭和17年の戦況を描くレコードや絵葉書

『加藤隼戦闘隊』は、加藤建夫中佐率いる一式戦闘機「隼」で構成される陸軍飛行第64戦隊の愛称で、軍歌や映画（東宝、山本嘉次郎監督）の題材になった。飛行第64戦隊は、飛行第59戦隊と組んで、1941（昭和16）年12月8日の開戦（マレー作戦開始）から1942年3月9日（蘭印作戦終了）の期間中、連合軍機61機を撃墜するという戦果をあげ、第64戦隊は3月21日

からビルマ（ミャンマー）戦線に参戦した。加藤中佐は5月22日に英軍機に撃墜され、ベンガル湾で亡くなられた。

『空の神兵』とは、大日本帝国陸軍・海軍の落下傘部隊（空挺部隊・挺進部隊）、落下傘兵（空挺兵・挺進兵）に対する愛称及びそれら落下傘部隊をえがいた日本の軍歌（作詞 梅木三郎、作曲 高木東六）の題名である。なお映画の題材にもなった。

太平洋戦争（大東亜戦争）蘭印作戦中の1942（昭和17）年1月11日、海軍の横須賀鎮守府第1特別陸戦隊がセレベス島メナドに、同年2月14日に陸軍の第1挺進団（挺進第2連隊）がスマトラ島パレンバン（パレンバン空挺作戦）に対し連合軍を前にして奇襲、落下傘降下を敢行し、飛行場や、大油田・製油所を制圧した。これらの活躍から日本軍落下傘部隊に対し「空の神兵」の愛称が付けられた。

## 1942年の戦況の推移

日本軍の東南アジア戦線では、シンガポールの陥落によってマレー作戦を完遂した。フィリピン方面では、1942（昭和17）年1月2日にマニラを占領。アメリカ軍はバターン半島に撤退し抵抗するが、日本軍の勢いはとどまるところを知らず、司令官のマッカーサーは3月12日に家族や幕僚、ケソンフィリピン大統領とともに、有名な「I shall return」（私は必ず戻る）の言葉を残して脱出した。残されたアメリカ軍も6月9日までに降伏した。東南アジアを防衛する連合軍側は、ABDA（アメリカ・イギリス・オランダ・オーストラリア）連合艦隊を結成し、日本軍に抵抗するが、バリ島沖、スラバヤ、ジャワ島沖海戦を経て壊滅した。東南アジアの資源地帯を占領し終えた日本は、占領地の維持確保のため、インド方面、ニューギニア・ソロモン方面、北太平洋・中部太平洋方面へ勢力圏を広げることと決定するが、作戦実施に向けた研究・準備を行っているさなかの4月18日、指揮官の名をとってドーリットル空襲と呼ばれる、アメリカ機動部隊による日本本土初空襲が行われた。そのため、アメリカ艦隊を抑えるのが急務と考えた日本は、6月上旬、ミッドウエー島沖で戦った（ミッドウエー海戦）が、快進撃を支えてきた航空母艦（以下「空母」とする。）4隻と巡洋艦1隻を撃沈されて敗北した。

ニューギニア・ソロモン方面の戦況は、ニューギニアの険しい地形と守備を固めた連合軍の前に停滞した。ソロモン諸島を巡る戦いは、飛行場建設適地のあったガダルカナル島を中心に行われ、日米は三次にわたるソロモン海戦をはじめ、周辺の島も含めて幾度も艦隊戦を行い、兵士を上陸させ、航空機同士の空中戦を繰り返した。ガダルカナル島の飛行場を占領したアメリカ軍は、危機に陥りながらも飛行場を保持し続け、周辺の制空権を失った日本軍は、奪還のために派遣した艦隊や補給路を脅かされるようになった。やがて、補給路を断たれた日本軍の兵士たちは深刻な飢餓に悩まされ、多数の餓死者を出すことになる。飛行場奪還の見込みが立たず、多数の将兵や艦船、船舶が失われた末にようやく日本軍は12月31日に撤退を決断した。

### アメリカ西海岸の通商破壊戦

清水光美中将率いる第6艦隊のうち9隻とも10隻ともいわれる潜水艦で組織された第6艦隊



あゝ軍歌 2 = 海ゆかば B 面及びパンフ、手前；大日本帝国軍歌集 B 面



パレンバン空挺降下作戦の絵葉書  
（三上家文書）

先遣支隊は、カナダ、アメリカ、メキシコの西海岸沿いの海域に展開、12月20日ごろからアメリカに対して、物資輸送を阻害し補給と船舶航行の安全を脅かすいわゆる通商破壊戦を行った。その結果、アメリカのタンカーや貨物船5隻を撃沈、5隻を大破したほかサンタバーバラ砲撃を行った。

福岡国民学校の写真には、3月1日付の大本営発表の掲示が写っており、この通商破壊戦の「戦果」の一部が書かれている。メンドシノという地名の記述と潜水艦の配置から攻撃したのは伊17潜と思われる。この通商破壊戦では、西海岸沿いで住民の前で貨物船を撃沈したために反日感情が高まった。



福岡国民学校（現福岡小学校）の黒板に書かれた大本営発表（昭和17年3月1日付）

**東京初空襲（ドーリットル空襲）**

これまで本土を攻撃されたことのないアメリカ政府とアメリカ国民は、西海岸の通商破壊とサンタバーバラ砲撃に大きな衝撃を受け、日本軍の本土上陸は避けられないと恐れたが、他方で、日本に衝撃を与えるために日本本土空襲が企図されており、4月1日にサンフランシスコを出港した空母ホーネットを中核とする第8任務部隊が、4月13日にウィリアム・ハルゼー提督率いる第16任務部隊と合流すると日本本土攻撃に向けて太平洋を東へ向かって航行した。当初、ハルゼーは、18日夕方に日本沿岸500カイリから発艦させて、夜間に空襲を行おうと考えていたが、日本軍の漁船による哨戒網に発見されたため、日本沿岸650カイリの地点で午前7

児童		児童		別種	初等科	高等科	科修特	計合
席女	欠男	席女	出男					
0	0	49	53	年學一				
1	0	62	40	年學二				
1	0	42	47	年學三				
0	1	40	58	年學四				
0	0	53	54	年學五				
3	0	42	47	年學六				
5	1	288	299	計				
0	0	48	32	年學一	高等科			
1	1	24	43	年學二				
1	1	72	75	計				
				科修特				
				計合				
		8	734					

学校日誌に見る4月18日ドーリットル空襲の記事（昭和17年福岡国民学校日誌）

時から9時頃にかけてドーリットル中佐率いる16機のB-25を発艦させた。16機の目標は、東京方面10機、横浜方面2機、横須賀方面1機、名古屋方面2機、神戸方面1機であった。そのうちロバート・グレイ中尉の3号機は、九十九里浜上空を通過、お昼頃川口市上空に達し、日本デーゼル工業に爆弾投下、葛飾区の水元国民学校に機銃掃射、金町駅付近に2発の爆弾を投下して房総半島南部へ抜けていった。この空襲は昭和17年福岡国民学校日誌に記載されている。

**浙贛作戦**

ジミー・ドーリットル中佐による16機のB-25による本土初空襲は、防空体制の不備をつかれた大本営にとって屈辱的なものであった。米軍機が中国本土に着陸したことを確認すると、二度と本土を空襲できないように飛行場を破壊するために、第13軍と第11軍の40数個大隊を杭州方面より西進させる作戦を



浙贛作戦の記録集

支那派遣軍に提示した。支那派遣軍では、作戦構想を82個大隊によってさらに奥地の江西省方面まで制圧するよう見直された。衛州、玉山、麗水<sup>れいすい</sup>の飛行場及び鉄道の破壊など作戦自体は成功したが、関東軍<sup>ぼうえき</sup>防疫給水部（731部隊）のコレラ、ペスト、チフスなどの細菌兵器が「栄」1644部隊を通じてもちこまれ、中国軍や現地住民のみならず日本軍にも被害をもたらした。

## ふじみ野市内から出征した兵士たちの戦場

開戦と同時に、ふじみ野市からも多くの人々が兵士として故郷を後にした。ふじみ野市に残された資料からは、1942（昭和17）年中に亡くなった方は、9名の名前が確認できる。内訳は、陸軍4名、海軍5名である。ふじみ野市内から出征し、戦死された方々は、中国大陸北部で2名、中部で1名、太平洋のパラオで1名、西太平洋マキン島で1名、戦艦艦上で1名の方が亡くなっている。海戦・空戦中に戦死された方もおり、ミッドウェー海戦で1名、第三次ソロモン海戦で2名の方が戦死された。

中国大陸では、1937（昭和12）年7月7日に発生した盧溝橋<sup>ろこうきょう</sup>事件から蒋介石<sup>ししやう</sup>率いる中華民国を主敵とした戦闘が続き、重慶などの内陸部を除き、全域で陸上戦闘が行われていた。

### ミッドウェー海戦

この海戦が激しかったことは、本来船体のうちで最も安全と考えられる機関部に被害が及び、ふじみ野市出身の海軍機関兵U氏が戦死されたことからもうかがわれる。心から哀悼の意を表すものである。海戦の契機となったのは、1942（昭和17）年4月18日、アメリカ航空母艦（空母）によるドーリットル空襲（日本本土初空襲）である。日本が受けた被害は少なかったが、空母を主力とするアメリカ機動艦隊を完全に阻止することは困難であることを認識することとなった。これによってオーストラリア、インド洋方面の航路遮断に目が向いていた軍令部とハワイ攻略を考えていた連合艦隊は、アリューシャン方面作戦とミッドウェー作戦の実施で合意した。一方、アメリカ軍側は迎撃準備を進めつつ、日本海軍の暗号解読に成功し、日本側の通信はアメリカ側に筒抜けになっていた。6月上旬のミッドウェー海戦で、日本海軍は主力空母4隻が撃沈、他に重巡洋艦（以下「重巡」とする。軽巡洋艦は「軽巡」とする。）1隻撃沈、1隻大破という損害を受けて撤退することとなった。この海戦の結果、アメリカ側は、空母1隻と駆逐艦1隻の損失でミッドウェー島防衛を達成した。主力の大・中型空母4隻を一度に失った日本海軍は、この海戦の後に攻勢作戦をとることが困難となった。

### ガダルカナル島をめぐる日米の攻防戦

ガダルカナル島へは、6月下旬から日本軍が上陸し飛行場（日本名「ルンガ沖飛行場」）を造成していたが、完成間際の8月7日明け方に、アメリカ海兵隊第1海兵師団の上陸及び占領を許すことになった。8月8日の第一次ソロモン海戦において、第8艦隊が米艦隊の重巡4隻を撃沈し、米軍のさらなる揚陸を一時的には阻止したが、8月21日に海岸から飛行場（米名「ヘンダーソン飛行場」<sup>だっかん</sup>）奪還を試みた一木<sup>いちき</sup>支隊は米軍の反撃を受け全滅、さらに8月23日から25日の第二次ソロモン海戦でも空母龍驤<sup>りゆうじやう</sup>を失い、基地航空隊60機が撃墜され、やはり飛行場奪還のめどが立たなかった。9月12日～14日に川口支隊が南側山沿いの背後から飛行場奪還を試みるが撃退された。10月13日、艦砲射撃により飛行場を破壊、10月25日及び26日に陸軍第2師団が飛行場奪還を試みるが失敗した。10月26日の南太平洋海戦において米軍のすべての空母を稼働停止に追い込むものの、空母1、重巡1、航空隊100機を失った。11月12日、第三次ソロモン海戦の前哨戦で基地航空隊所属と思われるふじみ野市内出身の飛行兵曹長の方が敢闘の末米軍機と激突し戦死された。12日～15日の第三次ソロモン海戦の第一夜戦では、戦艦1隻の沈没と引き換えに軽巡1隻を大破、重巡1隻の艦橋を破壊、前者を自沈に追い込み、米軍指揮官2名

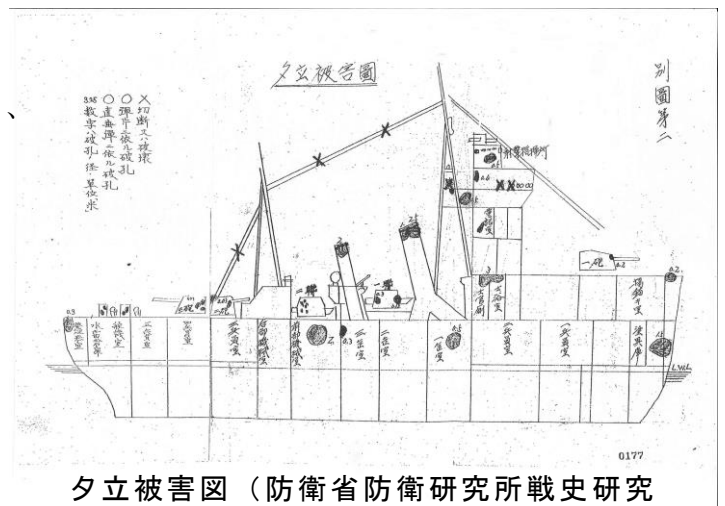


大東亞戦果学習地図

を倒し機能不全に陥らせる善戦をみせたが、第二夜戦でさらに戦艦1隻を失って、揚陸部隊もほぼ全滅で制海権と制空権を失った。そのため12月31日の御前会議にて飛行場奪還の断念と撤退を決定した。

**駆逐艦夕立の最期**

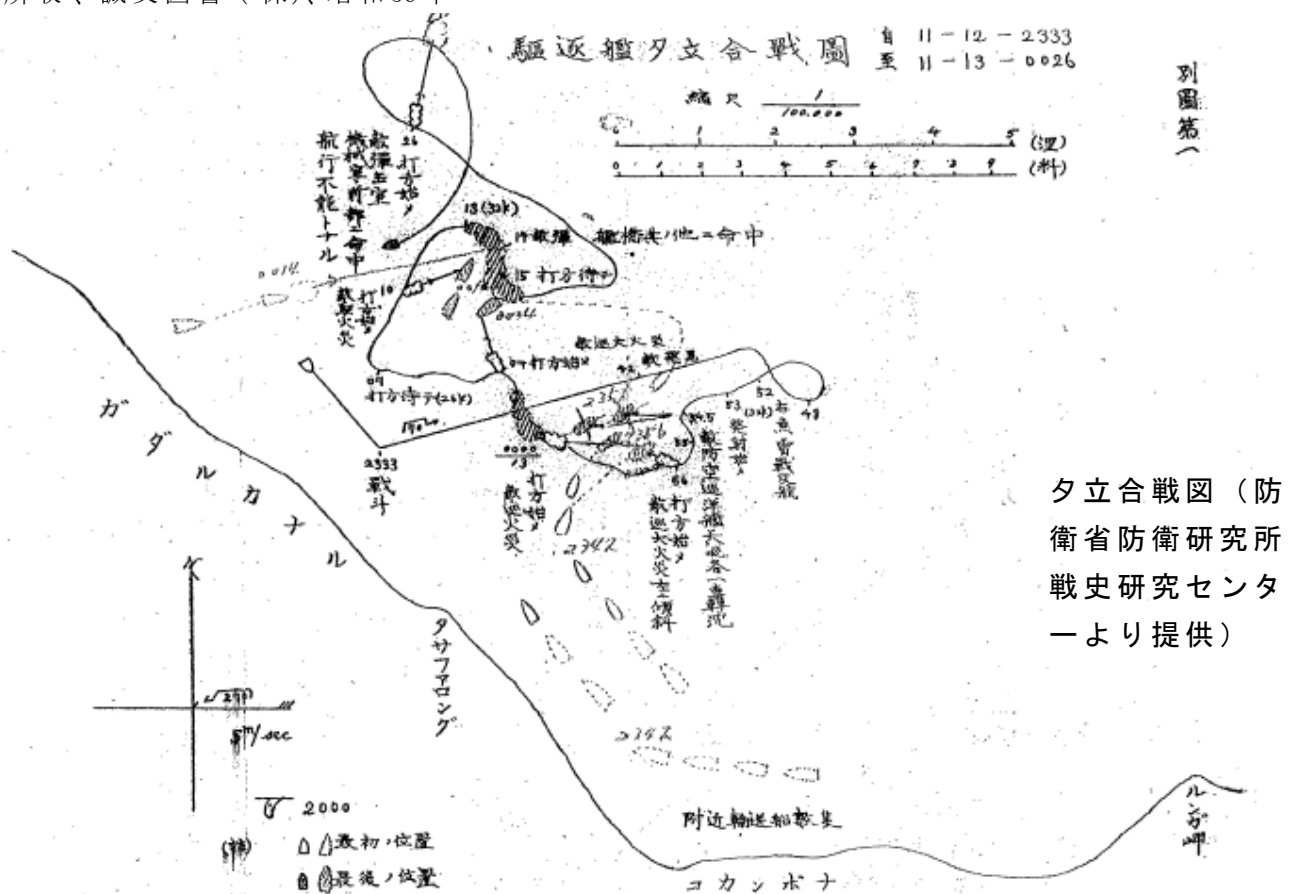
駆逐艦夕立は佐世保海軍工廠にて建造され、昭和12(1937)年1月7日に竣工した。昭和17(1942)年11月12日からはじまった第三次ソロモン海戦の激闘の末、大破操舵不能になって、沈められることになった。夕立が大破操舵不能になるまでの様子は、無線電話員であった<sup>ししど</sup> 宍戸善江兵長が手記に克明に記録している。夕立は艦長<sup>きよし</sup> 吉川潔中佐、前任将校兼砲術長である<sup>かほしまちとせ</sup> 樺島千歳大尉、水雷長<sup>ていじ</sup> 中村悌二中尉、乗組員233名であった。先頭をきるようにして春雨とともにアメリカ艦隊に突入した夕立は、11月12日午後11時59分頃、酸素魚雷を放って米軍の巡洋艦を2隻撃沈との通信を艦隊中波と隊内電話で送った。しかしアメリカ軍の照明弾に照らされて13日午前0時10分頃から前方から照射砲撃、左側面から集中砲火を浴び、電話員宍戸兵長は、13分ごろに顔を除く九か所に大けがを負った。その後火災の煙と出血のため一時的に意識を失った。右舷前部、艦橋下部(無線電話室、艦長室)などに命中弾を受け、腹に響くような激しい揺れ、部屋中にきな臭いほこりが立ち込めたという。アメリカ艦隊の近く



夕立被害図 (防衛省防衛研究所戦史研究センター提供)

にいたために味方艦からも砲撃を受けているようだ。マストに識別灯つけ、青、赤、青と発光させるものの、煙突が吹き飛ばされ、マストが折れ、識別灯もかき消される。射撃指揮所にも命中し、一番砲塔が火災に見舞われた。機関室にも敵弾が命中し、八重樫機関長以下総員が戦死した。こういった一連の被害の中でふじみ野市出身の兵曹長であるN氏が亡くなられたと考えられる。甲板は火の海で、船体前部の火災が広がって一番弾火薬庫に引火して爆発する恐れがあった。生存者は負傷兵まで総がかりで手動注水を行って消火に努めるが、0時26分ついに航行不能になった。2時になると五月雨<sup>さみだれ</sup>が夕立乗員収容のため訪れる。生存者は、艦長以下准士官以上13名、下士官兵194名204名であった。五月雨は、2時56分夕立を自沈させるために魚雷を放ち、夕立乗組員は乗艦が沈むのを敬礼して見送った。レーダーがないという不利な状況下でたいへんな敢闘をされた末戦死されたふじみ野市出身のN兵曹長をはじめとする乗組員の方々に心から哀悼の意を表すものである。

<<参考>> 宍戸善江「第三次ソロモン海戦(一)」 「海軍」編集委員会編『海軍』V(太平洋戦争1)所収、誠文図書(株)、昭和56年



夕立合戦図 (防衛省防衛研究所戦史研究センターより提供)

## 1942(昭和17)年の造兵廠

1937(昭和12)年から操業していた造兵廠は、1940年(昭和15)年に総面積168,000坪(554,400㎡)の買収を終えて「東京第一陸軍造兵廠第三製造所福岡工場」となった。1942(昭和17)年8月に製造所を独立させる組織改正が行われ、福岡がわかりづらいということで「東京第一陸軍造兵廠川越製造所」と改称され、この名称が終戦まで続くことになる。工場長もそれまで大尉か少佐であったのが中佐となった。昭和17年は、第三工場長の手による廠歌が作られ、ふじみ野市内の天神教会で守衛乙班がシンガポール陥落記念の記念撮影を行う(3頁参照)など、当時の高揚した気分をうかがわせる。